

II 病害虫発生予察事業

1 病害虫の発生経過概要及び発生原因解析

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イネ	苗立枯病	並	並	早期水稲、普通期水稲とも発生程度は平年並であった。病原菌は、フザリウム菌によるものが多く、こま葉枯病菌による立枯症も目立った。		
	いもち病 葉いもち	早期： やや早 普通期：並	早期： やや多 普通期：並	早期では、5月6半旬より発生が見られ、6月下旬の発生圃場率は49%、発病株率14%と高く、その後も曇雨天が続いたため進展し、ずり込みも各地でみられた。全般的にはやや多の発生であった。 普通期では6月6半旬より発生がみられ、7月下旬の発生圃場率は20%であったが発病程度は低かった。その後の進展も少なく、全般的には平年並の発生であった。	・5月下旬～7月上旬の長雨、寡照	・育苗箱施薬及び本田期における薬剤散布
	いもち病 穂いもち	早期： やや早 普通期： やや遅	早期： やや多 普通期： やや少	早期では、7月5半旬より発生がみられ、8月上旬の発生圃場率は13%、一部に発病総率96%の圃場が見られるなど、発生程度はやや多の発生であった。 普通期では、9月上旬より発生がみられ、9月下旬の発生圃場率3%、平均発病総率は0.1%以下であり、全般的にはやや少の発生であった。	普通期での少発原因 ・穂ばらみ期～出穂期の降雨少	・出穂前の粒剤施薬 ・出穂時に殺虫殺菌混合剤によりカメムシ類等の同時防除
	紋枯病	早期：並 普通期： やや早	やや少	早期では、6月5半旬より発生がみられ、7月下旬の発生圃場率は39%、平均発病株率は4.1%であった。出穂後の上位葉鞘への進展も少なく、やや少の発生であった。 普通期では、6月6半旬より発生がみられ、9月下旬の発生圃場率は38%、平均発病株率は2.9%とやや少の発生であった。	・穂ばらみ期～出穂期の降雨少 ・8月の気温が低く推移 ・分けつ数、穂数少なく、繁茂しなかった。	・穂ばらみ期～出穂期にコブノメイガ、ウンカ類との同時防除
	ばか苗病	並	やや少	早期、普通期ともやや少の発生であった。		・ベノミル耐性菌に有効な種子消毒剤の使用
	白葉枯病	早期：並 普通期： やや早	並	早期、普通期とも7月5半旬に初発を確認。台風通過後、常発地で発生がみられ発病程度も高かったが、その他の地区での発生は少なく、全般的には平年並の発生であった。		・常発地帯の一部で防除が実施された。
	もみ枯細菌病	並	やや少	早期では局部的に発生がみられた。 普通期では早生種で8月6半旬より発生がみられたが、その後の降雨も少なく、全般的にはやや少の発生であった。	・出穂時期の降雨少	・穂いもちとの同時防除

農作物名	病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
(イネ)	マク ^ロ コハ ^イ 萎縮病	並	並 やや少	越冬密度は平年並であった。第1世代成虫最盛期は6月3半旬、第2世代成虫最盛期は7月4半旬であった。発生時期、発生量とも平年並であった。 萎縮病の発生はやや少なかった。	・保毒虫率が低かった。	・箱施薬によりいもち病、ウンカ類等との同時防除 ・ウンカ類飛来時における同時防除
	ヒメトビウカ 積葉枯病	並 早期：並 普通期： やや早	並	ヒメトビウカの越冬密度は平年並であったが、第1世代幼虫の小麦圃場における生息量は前年よりやや少なかった。第2世代以降の発生量は平年並であった。越冬世代成虫最盛期は、3月6半旬、第1世代成虫最盛期は6月3半旬、第2世代成虫最盛期は7月2半旬で発生時期はやや早かった。第1世代の保毒虫率は2.0%であった。 積葉枯病は、早期では6月下旬より発生がみられ、その後各地で発生を認めたが発病株率は低く、やや少の発生であった。普通期では、7月上旬より発生、8月上旬の発生圃場率は10%、発病株率は0.1%以下で平年並の発生であった。	・保毒虫率が低かった。	・箱施薬によりいもち病、ウンカ類等との同時防除 ・ウンカ類飛来時における同時防除
	ヒ ^ン ウカ	やや早	やや多	5月19～21日初飛来、6月15～16日、6月30日～7月5日、15～16日、28～30日、8月3～5日を中心に飛来がみられた。飛来時期はやや早く、全体の飛来量は多かった。		・多飛来時の集結産卵期及び幼虫ふ化揃い期の防除
	トビ ^ウ カ	やや早	やや少	セジロウカとほぼ同時期の飛来であったが、主体は6月30～7月5日、15～16日、8月3～5日であり、飛来量は多かった。その後の増殖は低く、平均株当り寄生虫数は8月下旬0.2頭、9月中旬0.4頭とやや少の発生であった。8月下旬に早期水稲で坪枯れが初確認された。なお8月の短翅雌率は4.3%とやや低かった。	・防除の徹底 ・増殖率が低く推移し、また短翅雌率もやや低かった。	・飛来時にセジロウカとの同時防除 ・コブノメイガ等との同時防除 ・幼虫ふ化揃い期の単独防除
	コ ^ハ メ ^カ	並	やや多	5月30日に成虫を確認した。主な飛来は6月30～7月5日にみられた。飛来量はやや多であった。平均被害株率は早期では8月上旬19%、普通期では9月上旬14%であった。	・防除の徹底 ・増殖率が低く推移した。	・第1世代の防除はウンカ類との同時防除 ・第2世代以降の防除は紋枯病との同時防除
	イネス ^ザ ムシ	並	やや多	越冬密度は平年並であった。4月上旬には畦畔雑草で摂食活動がみられ、早期水稲では田植直後から圃場侵入がみられた。5月下旬の平均被害発生圃場率は9.2%、株当り寄生虫数は0.06頭で平年に比べやや多かった。普通期早植普通期早植地帯での発生量もやや多く、山間地などで被害が目立った。 普通期早植地区において発生の拡大がみられる。		・常発地帯では箱施薬による防除が主体 ・発生拡大地域では本田期における薬剤散布 ・新発生地では初期防除が徹底しなかった。

農作物名	病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
(イネ)	斑点米カミシ類	並	並	雑草地での発生量が多く、7～8月にかけては発生がやや多かったが、出穂期～登熟期に台風が通過。圃場密度が低くなり、被害粒の発生も少なかった。 早期では、8月上旬の発生圃場率が5%、20回すくい取りの平均値が0.1頭であった。普通期では、9月上旬の発生圃場率が4%、20回すくい取りの平均値が0.1頭であった。		・出穂期～乳熟期に穂いもちとの同時防除
	スミリングカイ	並	やや多	昨年秋期の発生が多く、また越冬生貝も多かった。既発生地域において面積の増加がみられ、やや多の発生であった。3月下旬以降水路での活動が認められ、県央地区では7月上旬の冠水により田植直後の水稻に加害し被害を生じた。	・冠水による侵入	・I B P 剤剤の施用。
ムギ類	さび病類	並	並	小麦の赤さび病は、4月下旬から発生、5月下旬には局部的に多発ほ場も見られたが全般的に平年並の発生であった。 その他のさび病類は極めて少ないか、あるいは発生を認めなかった。	・耐病性の低い品種の栽培面積が増加した。	・一部地域を除いて防除がほとんどされていない。
	うどんこ病	並	やや多	3月下旬から二条大麦と小安に発生、4月以降小麦と二条大麦で一部に多発圃場がみられ全般的にやや多の発生であった。		
	赤かび病	並	やや多	4月下旬に二条大麦に発生、5月以降小麦と二条大麦で一部に多発圃場がみられ全般的にやや多の発生であった。		
ジャガイモ	疫病	春作：早 秋作：やや遅	春作：やや多 秋作：やや少	春作：2月から発生し、5月以降多発圃場を認められるようになり、やや多の発生であった。収穫時の多雨により収穫塊茎の腐敗が多発した。 秋作：11月より発生を認め11月下旬に発生圃場率19%、平均発病株率2.5%とやや少の発生であった。	・初発時期が早かった。 ・生育期間を通じて降雨が多かった。	・発生が多く防除回数が6～7回におよんだ。 ・10月下旬以降2～3回の薬剤散布
	77ラムシ類	春作：並 秋作：並	春作：やや多 秋作：並	春作：5月以降増加し一部に多発圃場もみられ、5月下旬の平均寄生株率は72%とやや多の発生であった。 秋作：11月下旬の平均寄生株率49%、平均株当虫数7頭と平年並の発生であった。		・アブラムシの種類別に防除効果の異なる薬剤があり、使用薬剤の選択に苦慮
	ニョウモリコシテントウ	春作：並 秋作：並	春作：やや少 秋作：やや少	春作：やや少の発生であった。 秋作：10月下旬の平均寄生株率は0.1%でその後もやや少の発生であった。		・77ラムシ類との同時防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
(ジャガイモ)	食葉性カガ類	春作：並 秋作：並	春作：並 秋作： やや多	春作：3月より発生を認め、5月下旬の平均被害株率は4.8%であった。 秋作：9月より発生し、11月下旬の平均被害株率は10%とやや多く、主な加害種はハスモンヨトウ、オオタバコガであった。		・アブラムシ類との同時防除
	ジャガイガ	春作：並 秋作：並	春作：並 秋作： やや多	春作：4月下旬の平均被害株率は0.1%と平年並の発生であった。 秋作：10月下旬の被害発生圃場率は22%、平均被害株率は1.5%とやや多発生した。		
ダイズ	紫斑病	並	やや少	平年よりやや少の発生であった。		
	べと病	並	やや少	8月6半旬より発生がみられたが、その後進展は少なく、やや少の発生であった。		
	葉焼病	並	やや多	8月2半旬より発生がみられ、その後各地で発生した。 10月上旬の発生ほ場率は84%、平均発病株率は79%で平年よりやや多の発生であった。	・台風来襲多 7月29日 9号 8月22～23日 12号 8月28～29日 13号 9月14日 17号 9月27日 19号 ・8月上旬の断続降雨	
	ハスモンヨトウ	やや早	並	7月4半旬より白変葉がみられ、その後各地で発生した。 白変葉の発生圃場率は8月下旬で88%、9月上旬で100%と高くなったが、台風の通過後圃場密度は低下し、株当たり寄生虫数は9月下旬で0.03頭と少なく、全般的には平年並の発生であった。	・成虫飛来量はやや多であったが、台風来襲、防除 区で幼虫の増殖率低下	・8月下旬の若齢期を主体に防除が実施された。
	ウハ類	並	やや少	9月下旬各地で発生がみられたが、平年よりやや少なかった。		
	カミシ類	並	やや少	8月下旬以降各地で発生が認められたが、台風の通過後圃場密度は低下し、9月下旬以降の発生は平年よりやや少なかった。	・台風来襲多	・ハスモンヨトウとの同時防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
カンキツ	そうか病	並	やや多	春葉での初発は、4月20日に大村市で認め、平年並であった。その後5月中旬の降雨により葉での発生は増加した。果実での発生は6月になり増加し、7月上旬は発生圃場率29%、平均発病果率4.8%と高かった。9月下旬の平均発病果率は0.4%で、一部に多発圃場もみられ、全般にやや多の発生となった。	・4月下旬～6月の断続的降雨	・降雨のため薬剤散布の適期を逸した。
	かいはよう病	並	やや多	越冬病斑量は平年よりやや少なかった。春葉での初発は4月16日に大村市で認め平年並であった。その後の平均発病葉率は0.5%以下で推移した。果実での発生は7月下旬より認められたが、平均発病果率は0.5%以下で推移した。しかし、7月29日、9月14日、9月27日に台風が来襲し、9月下旬の発生圃場率は21%、発病葉率は1.7%、発病果率は0.7%とやや多の発生となった。	・台風の来襲が多かった。	
	黒点病	並	やや多	春期の枯れ枝の発生量は平年並であった。果実での発病は6月下旬より認められ、9月下旬の発生圃場率は84%、平均発病果率は31%で一部に多発圃場もみられやや多の発生となった。		・降雨のため薬剤散布の適期を逸した。 ・防除回数増加
	ヤノカイガラムシ	やや遅	並	1齢幼虫の初発時期は、第1世代が5月下旬、第2世代は7月下旬とともに平年に比べやや遅かった。発生量はともに平年並であった。 県下全域で本虫に対する寄生蜂の寄生が認められる。		
	ミカンハダニ	並	やや少	春先より発生が少なく6月下旬まで平均寄生葉率は1～2%程度で推移した。梅雨明け後の7月下旬には寄生葉率が15%と高くなったが、その後の防除により、8月上旬以降の寄生葉率は1～5%程度で推移した。その後10、11月の晴天乾燥によりやや増加したが平年に比べやや少ない状況にある。	・新規薬剤の登録 ・台風の来襲	・冬季(春季)のマシン油乳剤及び梅雨明け後防除の実施。
	カメムシ類	並	やや多	春先の越冬虫は平年並であった。ヒノキきゅう果における8月中旬の生息密度は高く、チャバネアオカメムシが主であったが、ツヤアオカメムシの寄生も目立った。予察灯への飛来も8月下旬より増加し、9月上旬以降多飛来が認められ、極早生温州を中心に被害がみられた。	・きゅう果の着果量が多かった。	・MEP、DEP、合ピレ剤等による防除。
	アブラムシ類	並	並	高接ぎ園、幼木園を中心に発生が見られたが平年並の発生であった。また、ワタアブラムシが主体であった。		・各地で合成ピレスロイド剤の効力低下が見られた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
(カンキツ)	キナキイロミダリ	並	やや多	越冬成虫と第1世代成虫の発生量は平年並であったが、第2世代成虫、及び8月中旬以降の発生量はやや多かった。被害果は6月下旬より認められ、8月上旬以降増加し、9月下旬の被害果発生圃場率は81%、平均被害果率は17%と平年に比べやや多の発生であった。		
ビワ	がんしゅ病	並	やや多	春葉での初発は3月15日と平年並、夏葉での初発は6月14日で平年に比べ早かった。発生は春葉、夏葉ともやや多かった。	<ul style="list-style-type: none"> ・台風の来襲多 ・3、5～6月の降雨日数が多かった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・登録薬剤が少ない。
	灰斑病	並	やや多	一部春葉での発生が多く、果実での発生も見られ、全般にやや多かった。		
	褐斑病	並	やや多	春葉、夏葉とも発生が多く、9月上旬には発生圃場率67%、平均発病枝葉率15%と高かった。		
	ナカクイ	並	並	フェロモントラップによる誘殺量は、各世代とも平年並であった。		
ナシ	黒斑病	並	やや多	初発は4月19日で平年並であった。その後、5、6月の曇雨天で発生が増加し、6月中旬には発生圃場率48%、平均発病率3%と高く、徒長枝葉での発生が多かった。平年に比べやや多の発生であった。	<ul style="list-style-type: none"> ・5、6月の降雨 	<ul style="list-style-type: none"> ・防除回数が多い
	黒星病	遅	やや多	初発は6月13日で平年より遅かった。一部発生の目立つ圃場も認められ、全般にやや多かった。		
	赤星病	並	並	初発は4月10日で平年並、発生量も平年並であった。		
	うどんこ病	並	並	8月下旬より発生を認め、9月には一部に多発圃場がみられたが、全般には平年並の発生であった。		
	ナカクイ	並	並	フェロモントラップによる誘殺量は、各世代とも平年並であった。		
	ハダニ類	並	並	7月上旬より発生が認められ、9月上旬には一部多発圃場も見られたが、全般には平年並の発生であった。		
	カメムシ類	並	やや多	越冬成虫量は平年並であったが、幼果期に一部被害がみられた。8月下旬から発生は増加したが、被害量は平年並であった。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
(ナシ)	アブラムシ類	並	並	ワタアブラムシの発生が主であり、5月上旬の平均寄生新梢率は27%と高かったが全般には平年並の発生であった。		
ブドウ	黒とう病	並	やや多	初発は4月25日に大村市で認め平年並であった。その後5、6月の降雨により発生が増加し、葉のみならず、果房での発生が目立つ圃場もみられ、全般にやや多かった。	・5、6月の降雨	・防除回数の増加
	べと病	並	やや多	梅雨期後半に発生が増加し、7月下旬の発生圃場率は78%、平均発病葉率は7%と高かった。		
	灰色かび病	並	やや多	開花期の曇雨天によりやや多かった。		
	うどんこ病	並	やや少	全般に発生はやや少なかった。		
	チャノキイロアザミ	並	やや多	第2世代の成虫発生量がやや多かった。穂軸での被害が目立ち、被害量はやや多かった。		
	アトウチカミキ	並	並	常発園での発生が目立ち、8～9月に成虫の羽化がみられた。		
チャ	炭そ病	並	やや多	二、三番茶期間中は降雨、曇天日が多く、二番茶後更新園、三番茶摘採中止園での発生が目立った。また、全般に秋芽への発生がやや多かった。	・二、三番茶期の曇雨天	
	もち病	早	やや多	二、三番茶期の降雨、曇天で例年より発生が早く、9月下旬には一部多発圃場も認められやや多の発生であった。		
	チャノコクモシハキ	並	やや多	第1、2世代の発生量は平年より少なかった。第3世代の発生量は平年よりやや多く、被害量がやや多かった。		
	チャノカガ	並	やや少	一部秋芽の被害がみられたが、全般にはやや少の発生であった。		
	チャノミドリヒメコハクイ	並	やや少	発生量、被害量とも、平年よりやや少なかった。		
	チャノキイロアザミ	並	並	発生量、被害量とも平年並であった。		
	カンザクハダニ	並	やや少	三番茶終了後、一部に発生がみられたが、各茶期を通して発生量はやや少なかった。		
	クワシロハダニ	並	やや多	第1、2世代の発生量は平年並であったが、第3世代の発生が多かった。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
冬春トマト (平成2年 植付)	疫病	並	やや少	12月下旬、一部圃場で発生が認められたが、全般にはやや少の発生であった。		・初期防除の徹底
	灰色かび病	並	並	平均発病果率は3月下旬0.1%と平年並の発生であった。		・薬剤耐性菌対策のため薬剤の輪播散布 ・被害果、花卉の除去
	葉かび病	並	やや少	全般に発生は少なく、11月より一部に発生し、3月下旬の平均発病株率は2%であった。		
	アブラムシ類	並	並	全般に平年並の発生であった。		
	タバココナジラミ	並	並	1月から発生が目立つようになり、4月の平均寄生株率は2%であった。		・発生が多いため薬剤散布回数も多い。
冬春トマト (平成3年 植付)	疫病	並	やや少	12月現在発生を認めていない。		
	葉かび病	並	並	11月下旬に発生圃場率9%、平均発病株率0.1%と平年並の発生である。		
	灰色かび病	並	並	12月現在発生を認めていない。		
	アブラムシ類	並	並	植付期より一部の圃場に発生を認めており、11月上旬の平均寄生株率は0.3%であった。		
	コナジラミ類	やや早	やや多	植付期より発生を認め、11月下旬に発生圃場率27%、平均寄生株率は2%とやや多の発生となっており、タバココナジラミの発生がみられる。		
冬春キュウリ (平成2年 植付)	べと病	並	並	平均発病葉率は12月下旬に1.5%、3月下旬に2.5%と平年並で推移した。		・発生が多いため薬剤散布回数も多い。
	うどんこ病	並	並	2月下旬に平均発病葉率3.9%と増加したが、4月下旬には0.1%と全般には平年並の発生であった。		
	灰色かび病	並	並	2月下旬、平均発病果率は0.7%、4月下旬には0.1%と平年並の発生であった。		・薬剤耐性菌対策のため薬剤の輪播散布
	菌核病	並	並	平均発病果率は12月下旬に2.5%と増加したが、4月下旬には0.03%と減少し、平年並の発生であった。		・被害果の除去

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
冬春キュウリ (平成2年 植付)	アブラムシ類	並	やや少	3月下旬の平均寄生葉率は1%とやや少の発生であった。		
	ミミキイロダニ	並	やや少	3月下旬の平均寄生葉率は0.02%とやや少の発生であった。		・定植時の粒剤施用 ・初期防除
	タバココナジラミ	並	やや少	3月下旬の平均寄生葉率は0.01%とやや少の発生であった。		
冬春キュウリ (平成3年 植付)	べと病	並	並	11月下旬の平均発病葉率は0.7%と平年並の発生であった。		
	うどんこ病	並	やや多	11月下旬の発生圃場率62%、平均発病葉率10%とやや多の発生である。	10、11月の晴天乾燥	
	灰色かび病	並	並	11月下旬の平均発病果率は0.2%と平年並の発生である。		
	菌核病	並	やや多	12月中旬の発生圃場率は30%、平均発病果率は0.2%とやや多発生している。		
	アブラムシ類	並	並	11月下旬の平均寄生葉率は0.1%と平年並の発生である。		
	ミミキイロダニ	並	並	12月中旬、平均寄生葉率は0.9% (前年 5.3%) と平年並の発生である。		
	コナジラミ類	並	並	11月下旬の平均寄生葉率は5%であったが12月に減少した。タバココナジラミの発生がみられた。		
メロン	モザイク病	並	やや多	CMV-ラゲナリア系によるモザイク病が5月より見られ、やや多の発生であった。	・生育初期のアブラムシ防除の不徹底	
	べと病	並	並	5月下旬の平均発病葉率は4%と平年並の発生であった。		・初期防除の徹底
	うどんこ病	並	並	5月下旬の平均発病葉率は0.1%と平年並の発生であった。		
	つる枯病	並	並	5月上旬の発生圃場率は19%、平均発病株率は1.4%と平年並の発生であった。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
メロン	アブラムシ類	並	並	全般に平年並で経過した。		・生育後半に発生が多かったため防除が集中した。
	ミナキイロガミ	並	並	4月下旬、平均寄生葉率0.7%と平年並の発生であった。		・初期防除の徹底
スイカ	つる枯病	並	やや多	生育前半は少発生で推移したが6月以降増加し、7月上旬の平均発病率は7.8%とやや多の発生となった。	・5月下旬以降の降雨	・初期防除の徹底
	炭そ病	並	やや多	6月下旬の平均発病率は17%とやや多の発生であった。		
	ハダニ類	並	やや少	全般にやや少の発生であった。		
	アブラムシ類	並	やや多	5月下旬に平均寄生葉率50%、平均株当り虫数は20頭とやや多発生したが、その後の長雨により減少した。		
春ハクサイ (平成2年～ 3年播種)	根こぶ病	並	並	平年並の発生であった。		・定植時の土壌施肥
	コナガ	並	やや多	5月下旬に平均寄生株率93%、平均株当り虫数1.7頭とやや多の発生であった。		
秋冬ハクサイ (平成2年 播種)	軟腐病	並	並	12月に一部で発生を認めたが全般には平年並の発生であった。		・軟腐病に対する慣行薬剤の効力不足
	白斑病	並	並	10月に発生を認め、やや低い発病程度で経過したが、12月下旬、平均発病率は18%と平年並の発生であった。		
	アブラムシ類	並	並	平均寄生株率は11月下旬10%、12月下旬18%と平年並で推移した。		・コナガとの同時防除
	コナガ	並	並	12月に増加し、平均寄生株率31%、平均株当り虫数11頭と平年並の発生であった。		・薬剤抵抗性対策のため薬剤の輪番散布
	ヨトウムシ類	並	並	9月より発生がみられ、11月下旬の平均寄生株率は4%、平均株当り虫数は0.05頭とやや多発生した。		
秋冬ハクサイ (平成3年播)	軟腐病	並	やや少	10月に一部の圃場で発生を認めたが全般にやや少の発生である。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
秋冬ハクサイ (平成3年播種)	白斑病	やや遅	やや少	12月中旬の発生圃場率は10%(前年38%)と発生はやや少ない。		
	アブラムシ類	並	並	12月中旬、平均寄生株率は28%と平年並の発生である		
	コナガ	並	並	12月中旬の発生圃場率は56%、平均株当虫数は1頭と平年並の発生である。		
	ハスモンヨトウ	並	やや少	10月に一部の圃場で発生を認めたが、全般にやや少の発生である。		
冬キャベツ (平成2年植付)	黒腐病	並	並	一部に多発圃場がみられたが、平年並の発生であった。11月下旬の平均発病株率は4%であった。		・初期防除の徹底
	菌核病	並	並	12月下旬の平均発病株率は1%で平年並の発生であった。		
	アブラムシ類	並	並	12月下旬の平均寄生株率は3%、平均株当虫数は0.2頭と平年並の発生であった。		・コナガとの同時防除
	コナガ	並	並	12月下旬に平均寄生株率は27%、平均株当虫数は2.2頭と平年並の発生であった。		・薬剤抵抗性対策のため薬剤の輪番散布
	モンシロチョウ	並	並	9月から11月にかけて発生し、全般に平年並の発生であった。		・コナガとの同時防除
冬キャベツ (平成3年植付)	黒腐病	並	並	一部に多発圃場を認めたが、全般には平年並の発生である。		
	菌核病	並	並	11月上旬から発生を認め、一部に多発圃場を認めたが、全般には平年並の発生である。		
	アブラムシ類	並	並	12月まで平年並の発生で経過している。		・コナガとの同時防除
	コナガ	並	並	12月中旬の発生圃場率は47%、平均株当虫数は1.1頭と平年並の発生である。		・薬剤抵抗性対策のため薬剤の輪番散布
	モンシロチョウ	並	並	12月中旬の平均株当虫数は0.01頭と平年並の発生である。		・コナガとの同時防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
タマネギ (平成2年 植付)	白色疫病	並	並	1月下旬には一部に多発圃場も認められたが、3月下旬の平均発病株率は8%と平常並の発生であった。		・初期防除の徹底
	べと病	並	少	一部に発生を認めたが全般に少発生であった。	・越冬病株が少なかった。	
	ネギアザミウマ	並	やや多	4月以降発生がみられ、5月下旬の平均発病株率は7.3%	・4月の降雨が多かった。	
	ネギアザミウマ	並	並	一部に発生し、全般には平常並の発生であった。		
タマネギ (平成3年 植付)	白色疫病	並	並	12月まで発生を認めていない。		
	べと病	並	並	12月まで発生を認めていない。		
	ネギアザミウマ	並	並	12月中旬の平均寄生株率は3.8%と平常並の発生である。		
	ネギアザミウマ	並	並	12月中旬の平均寄生株率は3.8%と平常並の発生である。		
冬ニンジン (平成2年 播種)	黒葉枯病	並	並	12月下旬に平均発病株率1.1%と平常並の発生となった。		
	うどんこ病	並	やや多	11月より発生が多くなり、12月下旬には多発圃場を認め、やや多の発生であった。	・11月の乾燥	・発生が多いため薬剤散布回数も多い。
冬ニンジン (平成3年 播種)	黒葉枯病	並	並	10月より発生を認め、11月上旬の平均発病株率は4.7%(前年4.2%)と平常並の発生であった。		
	うどんこ病	遅	少	12月まで発生を認めなかった。		
冬レタス (平成2年 植付)	灰色かび病	並	並	1月下旬の平均発病株率は0.3%と平常並の発生であった。		
	菌核病	並	やや少	発生は少なかった。		
	斑点細菌病	並	並	全般に平常並の発生であった。		
冬レタス (平成3年 植付)	灰色かび病	やや遅	やや少	12月まで発生を認めていない。		
	菌核病	並	並	11月より発生を認め、11月下旬の平均発病株率は0.1%である。		
	斑点細菌病	並	並	12月下旬、一部に発生が認められる。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イチゴ (平成2年 植付)	灰色かび病	並	やや多	2月以降増加し、3月下旬には平均発病果率2%とやや多発した。	・3月の降雨が多かった	・薬剤耐性菌対策として薬剤の輪番散布
	うどんこ病	並	並	12月下旬の平均発病果率は0.1%、3月下旬に0.3%と平年並の発生で推移した。		・EBI剤の使用頻度が高い。
	アブラムシ類	並	やや多	一部に多発圃場も認められ、12月下旬の平均寄生株率は11%とやや多の発生であった。		・薬剤の防除効果の低下した地域が見られる。 ・有効な登録薬剤が少ない ・ミツバチ導入時期の害虫防除が困難である。
	ハダニ類	並	並	12月下旬の平均寄生株率は1%と平年並の発生であった。		
	ハスモンヨトウ	並	やや多	定植期以降に多発し、10月の平均被害株率は30%とやや多の発生であった。		・有効な登録薬剤が少ない ・ミツバチ導入時期の害虫防除が困難である。
イチゴ (平成3年 植付)	炭そ病	並	やや多	育苗期から本圃初期にかけてやや多発した。従来と異なる葉枯れ性の症状が確認された。		・葉枯れ症に対して薬剤の効果は不十分であった。
	萎黄病	並	並	一部に多発圃場が認められるが全般には平年並の発生である。		
	灰色かび病	並	並	一部に発生を認め、平年並の発生である。		・薬剤耐性菌対策として薬剤の輪番散布
	うどんこ病	並	並	11月下旬の発生圃場率10%、平均発病株率0.2%であった。以後平年並の発生で推移している。		・EBI剤が運用される傾向にある。
	アブラムシ類	並	並	12月中旬の平均寄生株率は3.6%と平年並の発生である。		・薬剤による防除効果が低下した地域がみられる。
	ハダニ類	並	並	一部に多発圃場がみられるが、全般には平年並の発生である。		
	ハスモンヨトウ	並	やや多	定植期以降も発生が目立ち、9月下旬の平均被害株率は8%とやや多の発生となっている。		・ハスモンヨトウに登録のある薬剤が少なく、またミツバチ導入時期の防除が困難である。

農作物名	病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
ショウガ	モザイク病	並	並	7月より発生がみられ、平年並の発生であった。		
	紋枯病	並	並	9月下旬の平均発病株率は0.5%と平年並の発生であった。		
	白星病	並	並	全般に平年並の発生であった。		
	根茎腐敗病	並	やや多	9月下旬の平均発病株率は5%で、やや多の発生であった。		・発病後の防除が困難である。
	メイガ類	並	やや少	全般に発生はやや少なかった。		
	ハモロトク	並	やや多	8月下旬の平均被害株率は14%とやや多発した。		